

十六 「翔けりゆく冬のフェノール」

翔けりゆく冬のフェノール、 ポプラとる黒雲の椀^{わん}。

留学の序を憤り、 中庭にテニス拍つ人。

語注

フェノール 『新修宮沢賢治全集 第六巻』の「語註（小沢俊郎）」によると、「雲を石炭酸^{フェノール}の白色結晶塊にみたてたもの」とある。しかし島田隆輔も言うように、すぐ後に「黒雲」が登場することからすると、雲の比喩であるとは考えにくい（後掲B）。かと言って、島田の「異臭をはなつ毒物」という解釈も釈然としない。『新語彙辞典』ではフェノールの構造式を雪の結晶に見たて、「激しく雪の降りしきるイメージではなからうか」とする。魅力的だが、雪の結晶のことであれば「冬の」という形容は必要だろうし、テニスにも向かない。ここは酸性とアルカリ性を見分ける指示薬で、賢治も用いたと思われるフェノールフタレインのことだとすべきだろう。フェノールフタレインはpH6以上だと紅赤色に変化する。指示薬を一滴たらずと紅赤色がさつと広がっていくように、夕焼けの赤が空に翔けるが如くに広がっていった様子を表している^{と解したい}。

黒雲の椀 椀の形をした黒雲が、ポプラの木を空に引き寄せようとしている様子。歌稿Aに「白きそらは一すぢごとくにわが髪をひくこゝちにてせまり来りぬ」があるが、鬼気迫る感じに通じるものがあると思う。

留学の序 日本の学者にとつて留学とは、ただ研究そのものを進めるためではなく、研究者としての評価を確立させる上で欠かせないものであった。年功序列の学者社会にあつては、留学の機会も年齢の順に与えられることが多かったようだが、ここで「テニス拍つ人」が「憤り」を見せているのは、順序どおりに留学の機会が巡つてこなかったからのようだ。

評釈

黄野（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿と定稿が現存。生前発表はない。下書き段階では、「不平」助教授のタイトルが付されていた。先行研究は島田隆輔A「宮沢賢治・文語詩稿五十篇」詩系譜の論へ、「翔けりゆく冬のフェノール」試注から（上・下）、「島大国文」⁷・平成十一年三月／論攷宮沢賢治2⁷・平成十一年三月、島田隆輔B「翔けりゆく冬のフェノール」⁸、「宮沢賢治文語詩の森」・平成十一年六月・柏ブラーノ、澤田由紀子「新たな方法への模索 宮沢賢治・文語詩稿」考⁹（『宮沢賢治研究Annual vol. 10』・平成十二年三月）などがある。

島田はモデルとなった人物を『心の松風 小泉多三郎の面影』（昭和四十九年十二月・小泉久仁雄）等を参考にして、賢治が盛岡高等農林在学中に助教授であつた小泉多三郎であるうとしてしている。同書には小泉がテニスに熱中していたこと、また、海外留学を目前に教職を辞したこと等の記述があり、島田の論には十分な説得力があると思われる。

賢治はこの小泉と一緒に土性調査に出かける間柄であつたため、小泉の辞職を巡るさまざまな事情に通じていたと思われる。しかし、賢治が小泉に百パーセント同情していたのかというと、そうでもない。というのは、九年も後の作品ではあるが、『春と修羅 第三集』の「あすこの田はねえ」に、

「これからの本統の勉強はねえ／テニスをしながら商売の先生から／義理で教はることでないんだ」とあるからで、この時、賢治の頭の中に小泉のことが全く浮かばなかった、とは考えにくいからである。

ただ本作の主眼は小泉への同情でも批判でもないだろうし、理想的な教育とは何かといったことでもないだろう。

賢治は「いかりは赤く見えます。あまり強いときはいかりの光が滋くなって却て水の様に感ぜられません。遂には真青に見えます（大正九年六月～七月 保坂嘉内宛書簡）」と書いたことがあったが、賢治は人間の心の中の修羅が、空の色や雲の形にまで反映してしまっている（かのように思える）現場に居合わせただけである。本作の主眼はこの点にあるのではないだろうか。

賢治は怒りで赤くなった小泉の心が空にまで反映し、黒い雲までが大地に迫ってきてポプラの木を引きぬこうとしている…… という人間世界の修羅の様相（と、自然現象の共鳴）を描こうとしたのだらう。

土神はまるでそこ「ら」中の草がまっ白になって燃えてゐるやうに思ひました。青く光ってゐたそらさへ俄かにガランとまっ暗な穴になってその底では赤い焰がどうどう音を立て、燃えると思つたのです。

「土神ときつね」
「留学の序」への憤りで空の色が塗り替えられていく現場を見た賢治は、その後、嫉妬に狂う土神が、やはり空の色を塗り替えてしまう現場を描いている（「心象の中で」と言つべきかもしれないが）。

歌稿Aの大正七年十二月の項に「みちのくの夜はたちまち燃えいで、赤き怒りの国と変りぬ（七〇三）」という短歌があるが、制作年月（同年同月に小泉は盛岡高等農林の職を辞し、実業界に転じている）や状況が一致していることから、本作の先行作品であると言つてよいと思う。

十七 退職技手

こそりて人を貶おとししつゝ、

おのれこよひは暴あれんぞと、

粉緑金に生えそめし、

わかれうたげもすさまじき、

青き瓶袴も惜しげなく、

代にひたりて田螺たごひるへり。

語注

技手

技術系の官吏のうち、技師の下に位置付けられたもの。「山男の四月」に「ぎて」とルビがあることから、ここでもそう読ませようとしたと考えられる。正式には「ぎしゅ」と読むが、「ぎし」と紛らわしいために「ぎて」と読むことが多かった。

こそりて人を貶おとししつゝ 送別される立場の「技手」が、積もりに積もつた在職中の不満を、列席の人ににぶちまけた、ということ。

わかれうたげ 別れの宴。役所を退職する際にあつたのだらう。

おのれ 感動詞。物事に激昂し、自分を励ますために出す声。

瓶袴 「へいこ」と読む。裾が細くなっているために、保温や労働に向いていた。「もっぺ」「もんぺ」と呼ばれることもあり、賢治作品には「雪袴」として登場することが多い。

緑金 キラキラとした金属光沢のある緑色のこと。

評釈

黄野（20行）詩稿用紙に書かれた下書稿と定稿が現存。生前発表はない。先行研究は島田隆輔「宮沢賢治・文語詩稿五十篇ノ詩系譜の論へ（下）」「翔けりゆく冬のフェノール」試注から

『論放宮沢賢治2』・平成十一年三月)がある。

本作の下書稿は一枚しかなく、関連作品も今のところ見当たらない。ただ島田が「詩人宮沢は技手／技師の 詩系譜」を《文語詩稿》のなかで展開していた。技手／技師としての宮沢賢治の存在を自覚的にとらえようとしていた」と書いているように(前掲)、本作の主人公に、賢治自身の経験が投影されているだろうことは容易に想像できる。

大意は、「別れの宴席で餞の言葉を受けるどころか、そりもそろって非難の言葉を浴びせられた。こんなすさまじい会の後、感情を押さえることができずに田圃に飛び込み、腹立ち紛れに田螺を掬う……」といったところだろうが、モデルになっているのは賢治本人ではないかという発想は、当然、抱いてしまう。

賢治が東北砕石工場の技師(技手ではないが)を辞めたのは、昭和六年九月に東京出張した際に発熱し、遺書をしたためた時より以降ということになるが、そんな賢治に対して「わかれうたげ」がなされたとは考えにくい。また、その際に悪口を浴びせられた可能性は少ないし、田圃に飛び込んだ可能性もゼロに近い。

そこで農学校退職時の経験に基づくものではないかと考えてみると、明確な根拠と言えるほどのものはないが、『春と修羅 第三集』の「一〇七九 僚友(一九二七、七、一、)」には、「おろかにもまたおろかにも／昨日の安易な住所を慕ひ、この方室にたどって来れば、ノまことにあなたがたのことばやおもちは／あなたがたにあるその十倍の強さになってノ……風も燃え……ノわたくしの胸をうつのです」と、退職後、農学校の職員室を訪ねた賢治が、元の同僚からよそよそしい態度で遇されただろうことがうかがえ、この頃の農学校と賢治の関係について、おおよその見当をつけることができ

る。また「一〇七九 僚友」と制作日付も近い「一〇七七 金策(一九二七、六、三〇、)」では、「金持とおもはれノ一文もなくノ一文の収入もないノそしてうらまれるノ辞職でござるノそこで中間といふものはノ中間といふものをゆるさないノなにもかもしけないノ悪口、反感、ノ十八や十九でおとなよりも貪欲なこどもノなにもかみんないけないノおれは今日はもう遊ぼうノ何もかもノみんな忘れてしまつてノひなたのなかのこどもにならう」と、周囲の人への不満をぶちまけ、いっそのこと全てを投げ出して子供に返つて遊ぼうとする心理には、本文語詩に近いものを感じることができ、「辞職」の語があるのも、本作との近さを感じさせる。

こうして考えを進めてみると、「文語詩稿」を編みながら当時の自分とその周辺を振り返りながら、人間が生きていく限り感じるさまざまな想いについて、一種のカタログとでも言うべきものを作ろうとしていた賢治の面影が浮かび上がってくる気もするのだが、気になるのは本作の前に位置する、「翔けりゆく冬のフエノール」である。

小泉多三郎の辞職にまつわるいざごさは、賢治の カタログ作成 において恰好の材料だったと思われるが、小泉をもしも本作の主人公たる退職技手に置き換えると、「留学の序を憤」って高等農林の職を辞した彼の「わかれうたげ」が「すさまじき」ありさまであったことは十分想像できるし、『仲々のきかん気……短気は有名……勝負事は好きで、負けず嫌い等……』という側面もある人間味豊かな人物と想像される(島田隆輔、「翔けりゆく冬のフエノール」)、『宮沢賢治 文語詩の森』・平成十一年六月・柏プラーノ)という小泉が、「おのれこよひは暴れんぞと」「瓶袴」のままで田圃に飛び込むという豪放磊落な行動をとったというのも想像に難くない。少なくとも賢治その人をモデルと考えるより、よほど無理がない。

ただ、小泉の「わかれうたげ」であれば、「初」が「緑金に生えそめ」る季節ではなく、辞職した冬に催されたはずだから、小泉モデル説は不適当だとすべきなのかもしれない。しかし、賢治の文語詩においてこの程度の「虚構化」なら、ごくあたりまえに行われている……。

それでは本作品にモデルがあるのかないのか、あるとすればそれは誰なのか、と問われれば、「小泉の送別会の折に取材しながら、賢治自身の経験を織り交せて書いた」という折衷案を、現段階では提示しておくことにしたい。

十八 「月のほのほをかたむけて」

月のほのほをかたむけて、
搗けるはまこと喰みも得ぬ、
水杵はひとりありしかど、
渋きこならの実なりけり。

さらばとみちを横きりて、
祈るがとき月しるに、
束せし厩肥の幾十つら、
朽ちしとぼそをつかひぬ。

まどろむ馬の胸にして、
山の焼畑 石の畑、
おぼろに鈴は音をふるひ、
人もはかなくうまぬしき。

人なき山彙の二日路を、
塩のうるめの茎噛みて、
夜ざりはせ来し西蔵は、
ふたゝび遠く遁れけり。

語注

月のほのほ 本作の取材日である大正十三年四月十九日は満月。天気は雲がかすかにかかる程度であつたという。「ほのほ」は「炎」だが、月にかかる雲のことを視覚的にそう呼んだのだろう。

水杵 下書稿(一)では「水きね」とあるが、下書稿(四)では「水杵」あるいは「みずき」とある。音数の関係から「みずき」と読みたい。全長四メートルほどある「きねといふより一つの舟だ／舟といふより巨きなさじだ(どろの木の下から)」と表現されるようなもので、さじのようにえぐられた部分で水を受ける。脱穀や精白などに利用し、現地ではバッテリーと呼ばれることが多かった。

こなら ブナ科の落葉高木。食用にもなるが、そのままでは(渋くて)とても食べられたものではないようだ。

厩肥 小沢俊郎(後掲)に従い、ここでは「こえ」と読んでおく。家畜の糞尿と藁などを混ぜ合わせて腐らせたもの。良質の肥料となる。

とぼそ 「戸臍(とぼそ)」の意で、元は開き戸のかまちに設けた、枢(とまら)を受ける穴のこと。転じて、扉または戸を指す。

うるゐ オオバギボウシのこと。ユリ科の耐寒性多年草で、日本には多く自生している。鑑賞用に用いられるが、若い葉や茎はくせがなく美味で、ひたし物、あえ物、てんぷらなどにする。塩漬けや茹でたものを乾燥させて保存することも多かった。

評釈

『春と修羅 第二集』の口語詩「まどろの木の下から」を文語詩に改作したもの。原稿は黄野(20行)詩稿用紙に書かれた下書稿(一)、その裏面に下書稿(二)、その余白に下書稿(三)、下書稿(四)。定稿用紙に定稿。生前発表はない。下書稿(一)の段階で「セレナーデ」のタイトルが、下書稿(三)では、「兇賊」のタイトルが付されていた。

先行研究には小沢俊郎「人は熟睡し」(小沢俊郎宮沢賢治論集3)・昭和六十二年六月、栗原敦

「文語詩稿」試論(宮沢賢治 透明な軌道の上から)・平成四年八月・新宿書房、水上勲「宮沢賢治文語詩に関する二、三の問題」(帝塚山大学人文学部紀要1)・平成十一年九月)などがある。口語詩についての言及は池上雄三「宮沢賢治 心象スケッチを読む」(平成四年七月・雄山閣)をはじめと

して数多い。

口語詩の最初の形態である「六九 路傍」をあげてみよう。

六九

路傍

一九二四、四、一九、

四本のくらいからまつ梢に
かがやかに春の月がかり
やなぎのはなや雲さびが
しづかにそこをわたってゆく

……赤く塗られた鳥の卵と

その影と……

さはしきももうひつこんだのに
厩では鈴がかすかに鳴ってゐる

……この枯れ芝生なら

暗さややはらかさは

すっかり鳥のこころもちだ……

鈴がかすかにまたひびくのは
ねむつてゐる馬の胸に吊るされ
呼吸につれてふるえるのか
きつと馬は足を折つて

蓐草の上にかんばしくねむつてゐる

わたくしもまたねむりたい

……誰かが馬盗人とまちがへられて

腕にピストルを射込まれた

どこかで鈴とおんなじに鳴く鳥がある

たとへばそれは青くおぼろな保護色だ

むかふの丘の陰影のなかでもないてゐる

それからいくつもの月夜の峯を越えた遠くでは
風のやうに峡流も鳴っている

賢治は十九日から二十日にかけて、外山種畜場の種馬検査を見学に行った。外山は盛岡市の北東およそ二十キロの山間にあり、賢治は前日から夜通し歩いて種畜場に向かっている。眠気と疲労、人恋しさのあまり、賢治はどこかの家の厩でも仮眠しようと思ったようだが、「ひるの仕事でねむれないといつてノイマごろこゝらをうるつくことはノブラジルでならノ馬どろぼうに間違はれてノ腕に鉛をぶちこまれても仕方ない」「どろの木の根もとで」「という物騒な思いが頭を掠める……。口語詩にはおよそそのようなことが書いてある。

ところが文語詩下書稿(一)になると、恋する男が登場し、「きみしたひこゝにきたれば」などという言葉が含まれるから、深夜の密会、あるいは夜這いをかけにやってきたように改変され、欄外には「Romanzelo」という文字も記されている。虚構化と言つてしまえばそれまでだが、口語詩の手入れ段階にも「盛岡の方でかすかに犬が啼いてゐるノわたくしはそこへ急いで帰つて行つてノ誰かひとりのやさしい人とねむりたい」という部分があり、翌日の日付が付された「有明」にも「しかも変らぬ一つの愛をノわたしはそこに誓はうとする」とある。また閑登久也が「ある朝、館の役場の前の角で旅装の賢治に会いました。それは前の話より、よほどあとのことですが、たぶん賢治三十歳前後のことだと思ひます。顔が紅潮していかにも洗刺とした面持ちでした。どちらへおいでになつたのですか、ときくと岩手郡の外山牧場へ行つて来ました。昨日の夕方出かけて行つて、一晩中牧場を歩き、いま帰つたところです。性欲の苦しみはなみたいていではありませんね。そういつて別れました。

『賢治随聞』・昭和四五年・角川選書」という証言をしていることから考えると、まんざら虚構だとばかり言えないように思うが、今は解明のための手立てがない。

ただ、この構想は文語詩下書稿(一)の手入れ段階で早くも撤回されたようで、タイトルは「セレナーデ」から「探偵」に改められている(『校本全集』では、「探偵」のあと行換えし、字下げして「セレナーデ」と書かれていたものが抹消されたとあるが、『新校本』では「セレナーデ」が抹消されて「探偵」に改変。その後「探偵」も抹消されたという風に改められている。生原稿を見る限り『新校本』の判断が妥当だと思われる)。

更に、下書稿(三)では、「兇賊」というタイトルが付され、「稲妻」(のち寅吉に改変。さらに定稿では西蔵に改変)なる人物が登場している。この男がいかなる「兇賊」かと言えば、「のぼる水杵に近づきて／白をさぐればはかなしや／粟の殻こそ搗かれたれ」や、「さらばとみちをよこぎりて／家の内外をうかゞへば／七十ばかり厩肥の束／月にならびて干されけり」(下書稿(三))という記述からして、泥棒だということがわかる。

さて、仮眠する場を求めて山村を彷徨う賢治は、下書稿(一)で恋する男、そして探偵に。さらに下書稿(三)で兇賊に変化していくわけである。一見すると、この四者に接点は全くないようにも思えるが、「夜陰に紛れ、人目を忍んで行動する」という意味で、彼らは実によく似た存在なのである。

本作について、栗原敦は「西蔵」を描きつつも、むしろこの農家の生活、山村の人々の労働と暮らしたの深い実在感」をテーマにしているのだとし(前掲)、また小沢俊郎は早くから「この詩で何よりも目を引くのは山村の貧しさである。2行で、決して食えぬようなのならの実を搗いていること。4行の朽ちてしまった戸。6行の山を切り開いた焼田や石ころだらけの畑。同じく6行のすき間から見える人の寝姿、それも「はかなく」ということばが示す働き疲れた姿。それらはいずれもこの村の貧しさを示している」と指摘してもいた(前掲)。

明治九年七月に明治天皇は東北巡幸したが、同行した『東京日日新聞』記者の岸田吟香は、盛岡市内の物産陳列所で、一行は下閉伊郡九戸郡山中の食物として「栃の実又は櫛の実を搗碎きて湯を透し、薺の粉や稗などを雑て団子の如くしたる物」を見て、まるで「鳥の糞」であり「人間の口に入るべき物」ではないと評している(河西英通『東北 つくられた異境』・平成十二年四月・中公新書)。本作では東京人の目には「鳥の糞」にしか見えないものを、まさに食べようとしている人間が登場しているのだ……。

しかし、ここに描かれているのが山村の貧しさであると言ってしまうと、文語詩世界はずいぶんと思苦しいものになりはしないだろうか。

そもそも小沢が説くような山村の貧しさの描写は、下書稿(三)の段階以降に表面に出たものが多い。この下書稿(三)はタイトルが「兇賊」に改められた段階であるから、山村の貧しさというものは「兇賊」の視点(感情)を描くために盛り込まれた背景画に過ぎない、と極言することさえ可能だと思ふ。

その線に沿って解釈してみると、「水杵はひとりありしかど／搗けるはまこと喰みも得ぬ／渋き」ならぬ実なりけり」というのは、山村の貧しさの客観的な記述であるというより、「一仕事してやるうと思つて、人の気配のない水杵に近寄って確かめたら、そこにあったのは、なんと、まともに食べることもできないのならの実であった!」という泥棒の極めて主観的な嘆きの声であるということになる。

続く「さらばとみちを横ぎりて／束せし厩肥の幾十つら／祈るがごとき月しるに／朽ちしとぼそをうかゞひぬ」というのも、「それならば、今度こそ」とばかりに、道を横切つて母屋に向かうと、そこにはあるのは厩肥ばかり(もちろん食べられない!)。そこで朽ちた戸の中を覗いてみた」であり、これも泥棒の視点である。「祈るがごとき」という言葉も、「今度こそ、腹のたしになるようなもの(あるいは金目のもの?)」があつてくれ」という泥棒の「祈り」だと解釈できるのではないだろうか。

「まどろむ馬の胸にして／おぼろに鈴は音をふるひ／山の焼畑 石の畑／人もはかなくうまぬしき」は、「馬に付けられた鈴が鳴るのに気づき、はっとさせられたが、しめしめ家人は気づかず眠っ

ているようだ」という、これもまた泥棒ならではの視点である。酉蔵はこうしてわずかに「塩のつるみ」だけを手に入れて、夜の闇に消えていくわけである。

小沢と栗原は、口語詩から文語詩への過程を「作品の主題が作者の感情から山村の人々の労働と暮らしの深い実在性へとかわ(栗原)」り、そこに羅須地人協会の挫折を経験し、病床での不自由な生活を強いられる賢治の円熟を見ているようだ。そうシリアスにはかり捉える必要もあるまい。むしろ深夜の山村であれこれと一人で考えをめぐらせてはドキドキしたりほっとしたりしたかつての自分の経験を、酉蔵を主人公とした農村喜劇に書き換えた、という方向について考えてみてよいのではないだろうか。

十九 「萌黄いろなるその頸を」

萌黄いろなるその頸を、
吹雪きたればさながらに、

直くのばして吊るされつ、
家鴨は船のごとくなり。

五厘報謝の夕まぐれ、
鮫の黒身も凍りけり。

語注

萌黄いろ 萌葱、萌木とも書かれる。黄色みがかった緑色のこと。

五厘報謝 口語詩の下書稿によれば、吹雪の中を歩いてきた巡礼に魚屋の主人が五厘をあたえた、ということ。

鮫の黒身 一九九五年のデータによるとサメの漁獲量の第一位から第五位までは東北地方が占めている(岩手県は第二位)。好んで食べられるのは肉質の白いアブラツノザメで「黒身」には合わない。ここでいう「黒身」とは、アオザメなどの赤肉だったということになりそうだ。サメの肉には尿素とトリメチルアミンオキサイド(従ってサメの肉は一般にアンモニア臭い)が含まれているために腐敗しにくく安価でもあったため、広島県三次市のような山間の町でも好んで食べられることがあった。本作の舞台である花巻近郊でも食べられたのだろう。木村東吉は「高齢の方の証言によると、戦前岩手県の間部では大きな鮫も店頭にあった」と書いている(後掲B)。

評釈

『春と修羅 第二集』所収の口語詩「四一五「暮れちかい 吹雪の底の店さきに」」を改作したもので、口語詩の下書稿(三)の余白に下書稿があり、定稿用紙に紙面を改めて定稿がある。現存稿は二。先行研究には小沢俊郎の「吹雪の日に」(『小沢俊郎宮沢賢治論集2 口語詩研究』昭和六二年四月・有精堂)、山口達子「賢治」文語詩篇定稿の成立(『大谷女子大学紀要』2002・昭和六一年一月)、吉田司「宮沢賢治殺人事件」(平成九年三月・太田出版)、木村東吉A「四一五「暮れちかい 吹雪の底の店さきに」考 詩稿成立過程の再検討と詩群崩壊の内実」(『宮沢賢治《春と修羅 第二集》研究』平成十二年二月・溪水社)、木村東吉B「「萌黄いろなるその頸を」」(『宮沢賢治 文語詩の森 第三集』平成十四年七月・柏ブライノ)などがある。

元となった口語詩には(一九二五、二二、一五)の日付があり、賢治はひどい吹雪の中を、汽車に乗ってどこかに出かけたようである。賢治はこの日、少なくとも十作品を書いたことが作品番号からわかるが、現存する作品のタイトルだけ掲げておくと「四一〇 車中」(『文語詩稿 一百篇』の「保線

「工手」に改作(一)、「四一一 未来園からの影」、「四一五(暮れちかい 吹雪の底の店さき)」(一)、「四一九 奏鳴的説明」である。

下書稿(一)の手入れ結果は次のとおり(木村東吉Aは『新校本全集』における本作の詩稿成立順序に異を唱え、さらに本作が『春と修羅 第二集』から削除されたという論考を発表しているが、ここでは『新校本全集』の表示に従った)。

四一五

魚舖

一九二五、二、一五、

まずは首尾よく家鴨を締めて

萌黄いろしたその頸を

きれいに撫でて軒に釣り

両手を組んでごちつと鳴らし

店を一ぺん目測し

台のはじから手がぎをとって

あかをと鱈を置き直し わかめの束を重ねれば

吹雪が飛んで吹雪が飛んで つるした家鴨はぶらぶらゆすれ

土間では鮫の黒肉が凍る

もんば帽子に緋の台羽 …… (帰命頂礼地蔵尊)

鈴を鳴らしたにせ巡礼に

五厘やらうと五厘をさがし

一銭やって追ひ払ひ やつと火鉢に戻って来れば

吹雪が飛んで吹雪がとんで

つるした家鴨ははげしくごき

鮫の黒肉もあかをも凍る

これが下書稿(二)の段階から「四聖諦」というタイトルに改められ、下書稿(三)の段階ではタイトルも削除され、文語詩に改作されている。

「四聖諦」というのは、四諦、苦集滅道とも呼ばれる原始仏教における中心的な思想で、「苦諦とは、我々すべての存在は生老病死などの苦に悩まされる苦的存在であるという真理。集諦の集とは原因」という意味で、苦を生ずる原因は渴愛に代表されるこころの汚れ煩惱であるという真理。滅諦とは、煩惱を滅した状態は寂靜なる涅槃であるという真理。道諦とは、涅槃に導く道は、八正道などの実践であるという真理(平凡社・大百科事典)を指すとされる。小沢俊郎(前掲)は、登場人物の誰が四聖諦の何にあたるかというのではなく、それぞれの存在のあり様に、「仏教的因果を閃きのように感じ取った」のだという。

なにしろ、たった今、殺生をしたばかりの魚屋が、その手でもって「五厘報謝」をし、「おもむるに呪し」たというのだから、その時賢治がなにがしかの「仏教的因果」を感じた可能性は十分にある。さらに「百姓たち」にしても、仮にも巡礼に出ているというのに、そんな魚屋からの「報謝」をありがたく頂戴しているのだから、「にせ巡礼」と言われても仕方がない(木村Bは、当時「緋台羽」はおしゃれなものであり、巡礼の装束としては似つかわしくなかったのではないかと指摘している)。

しかし、巡礼たちに五厘でも与えておいて、早いところ追ひ払ってしまおうとした魚屋の主人が、五厘が見つからないために泣く泣く一銭を与えたというのは、どう考えても喜劇的状况だと言つべきではないだろうか。また「吹雪が飛んで吹雪が飛んで つるした家鴨はぶらぶらゆすれ」という句も、「仏教的因果」と言つよりは、ユーモラスな俗謡調だと言つた方がいいのではないだろうか。

文語詩になると作者のシニカルでシリアスな批評も目につかなくなると共に、ユーモアも窺えなくなっており、どちらに解釈すべきかは迷うところであるが、それでも尚、まじめくさって「仏教的因果」を説くふりをしながら、吹雪の下でたくましく生きる庶民群像をユーモラスに描きながら影

で舌を出している賢治がいるのだと解釈できる余地はある。

二十 「氷柱かゞやく窓のべに」

氷柱かゞやく窓のべに、
横めきびしく扉を見る。

「獺」とよばるゝ主幹めて、

赤き九谷に茶をのみて、
つらゝ霰をひらめかす。

片類ほゝえむ獺主幹、

語注

氷柱 「つらら」と読みたい。終行に「つらゝ」という仮名表記もあるが、文字面の問題であろうと思われる。

獺 カワウソのこと。イタチ科の水生哺乳類で、大正の頃から日本では毛皮のための乱獲と環境の悪化により激減。魚を捕まえると、自分の回りに並べて、神に捧げているように見えることを「獺祭」と言ったが、正岡子規は身の回りにたくさんのお伴を並べていることから自ら獺祭書屋と号した。「獺」のあだ名はおそらく主幹の風貌から付けられたのだろうが、身の回りに多くの書類を並べているところからついたものかもしれない。

主幹 ある仕事の中心となつて働く人のこと。

九谷 石川県江沼郡山中町九谷で焼かれた焼き物のこと。化政期以降、金沢や小松、加賀でも焼かれるようになり、ことに明治に入ると輸出货量は有田焼を上回るほど人気があった。ここでは「獺主幹」の使つていた湯呑みのこと。

評釈

現存するのは定稿のみ。生前発表なし。先行研究なし。

「文語詩稿 五十篇」の配列をそのまま信じれば、次に収録されている「来賓」との連続性を考えるべきだろう。

来賓

狩衣黄なる別当は、

眉をけはしく茶をのみつ。

袴羽織のお百姓

ふたり斉しく茶をのみつ。

窓をみつめて校長も、

たゞひたすらに茶をのみつ。

しやつぶを塗れるガラス戸を、

学童らこもこものにのぞきたり。

「来賓」は、おそらくは賢治が小学校の新年会(?)に招かれた時、控え室となつてゐる職員室

(校長室?)で、「日高神社の別当」を初めとする正装した来賓の中に紛れ込んだ時の意識を描いたものである。この詩の下敷きになつた口語詩「職員室にこつちが一足はいるやいなや」は次のようなものである。

職員室にこつちが一足はいるやいなや

ぱつと眉をひそめたものは

黄の狩衣によそほえる

日高神社の別当だ

半分立って迎へるものは

黒紋付に袴をはいた

二人の小さなお百姓
当然ここで

ぼくが何かを云ふべきであるが
何せあのまっ青な大高気圧の下で
引き汐のやうに奔つてゐる

乾いて光る吹雪のなかを
二里も泳いでやつてきたので
耳だの頬だのぼうぼう熱り
咽喉はひきつって声が出ない

みんなだまつてお茶をのむ
わづかに濁り粕もはいつた日本の緑茶
校長さんもだまつてお茶をつぎまはる

日高神社の別当は

怒らなくてもいゝわけだ

あの早池峰の原林を

いくらじぶんが先達で

夜なかにやつてきたからといって

だまつてみちに立つてゐる

こつちにいきなりつきあたって

叫びをあげて退いたのは

そつちの方が悪いのだ

アステイルべの花の穂が

あちこち月に光つてゐたし

そんな闇ではなかつたのだ

けれども向ふの怒るのは

こつちの覇気でもあるらしい

こどもらがこつそりかはるがはる来て

がらすの戸から口をあいたりのぞくのは

水族館のやうでもある

おとなもそろそろ来てゐるやうだ

日高神社の別当は

いまだに眉を上げしく刻む

同じ催しに招かれた日高神社の別当と賢治には、かつてトラブルがあったようで、賢治が部屋に入つてくるとたちまち空気が凍りついてしまう。そこで小学校の「主幹」たる校長は、なんとかその雰囲気を和ませようとするので、「だまつてお茶をつぎまはる」しか方策が思いつかない。そんな詩である。

これを文語詩にした「来賓」と、「氷柱かゞやく窓のべに」「を比較してみると、まず季節は冬で一致しており、「主幹」も「校長」も共にお茶を啜っている。「氷柱かゞやく窓のべに」では、主幹が片類だけ愛想笑いしているが、これは気まずさを紛らわせようとしてのものだろう。また主幹は「横めきびしく扉を見」ているが、「来賓」の校長もやはり「窓をみつめて」いる。どちらも「学童ら」がこの様子をおもしろがって覗き見しているのを苦々しく思つてのことだろう。

「文語詩稿 五十篇」を配列どおり読み進めると、「氷柱かゞやく窓のべに」は「来賓」の前に突然挿入されている印象があるが、「氷柱かゞやく窓のべに」には、今のところ下書稿も見つかっていないし、関連作品も指摘されていないので、その印象に違わず、本作は「来賓」を定稿用紙に書く際に突然挿入された作品なのかもしれない（定稿の筆跡も類似しているが、定稿の筆跡はどれも似

ており決定的な証拠にはなり得ない)。

今回評釈を施した十六番目の「「翔けりゆく冬のフェノール」」と十七番目の「退職技手」、そして二十番目の「「氷柱かゞやく窓のべに」」と二十一番目の「来賓」は、連作である可能性があることを指摘した。内容に関する検討ももっと進めるべきだろうし、推敲の経緯や定稿の配列がなぜ決まったか等々、考えなければならぬことは多々あるが、文語詩を解釈する鍵として、下書稿や先行作品、伝記的事実の他に、定稿の配列も含めてよい場合があることだけは、提案しておいてもよいかと思われる。

ただ、「「翔けりゆく冬のフェノール」」と「退職技手」、「「氷柱かゞやく窓のべに」」と「来賓」のどちらも、いわゆる連作、つまり『広辞苑』によるところの「和歌・俳句において、一人が同じ主題で数首または数句をつらね、全体として特別な味わいを出そうとする作り方(傍点引用者)」には、なっていないことを改めて確認しておきたい。つまり、本来離れて収録されてもよかったものが、たまたま連続してしまっただけだと考えることも十分に可能である(実際、同じ時の経験を扱った作品が離れて収録されている例は数多い)。